

江戸東京博物館友の会会報

目次

| | |
|-----------------------------|----------------------------------|
| 竹内誠館長記念講演「紀伊国屋文左衛門の実像」……1～2 | 友の会セミナー「江戸の時刻制度と和時計」……………6 |
| 第12回定期総会開催……………2 | 友の会セミナー「新川、小名木川・塩の道」……………7 |
| えど友広小路……………3～5 | 友の会特別観覧会「日本橋～描かれたランドマークの400年～」…8 |
| 会員に聞く「名物ガイドの山本市郎さん」/会員からの投稿 | 江戸博クリップ「私の好きな音楽」……………8 |
| 「上野と私」、「寛永寺將軍霊廟前の石灯籠」/えど友サー | 見学会「再訪 江戸四宿を歩くー内藤新宿」……………9 |
| クル日より/えど友サークル紹介「神田川を歩き楽しむ会」 | 江戸名所図会を歩く…② [田安の台から柳森神社] ……10 |
| /お知らせ「友の会ホームページを一新」/友の会めも | 催事案内/会員優待のお知らせ……………11～12 |

江戸東京博物館友の会平成24年度定期総会 記念講演（平成24年5月26日）

「紀伊国屋文左衛門の実像」

江戸東京博物館 竹内 誠 館長

紀伊国屋文左衛門、誰でも知っている有名人ですが、そのわりに実像が分からない人です。

新しく発見された資料を基に最新の紀伊国屋文左衛門の実像をお話いたします。

元禄の時代とは

五代將軍徳川綱吉の時代延宝8年(1680)から宝永6年(1709)の30年を大きい意味での元禄の時代といいます。どんな時代だったかというとお犬様を大切にしたりか寺社をやたらに造ったという悪口が言われますが、江戸前期の急成長の頂点が元禄で七堂伽藍の巨大寺院の造営や新しい橋の架橋は大きな経済効果のあるプロジェクトであり、幕府側に集まったお金を下にどんどん流す効果がありました。しかしやがて幕府の資金が枯渇したのに、今までと同じように資金を下に流すために、貨幣の質を落とした元禄の貨幣改鋳が行われ、相対済まし令(いわゆる棄捐

令)が施行されましたが、飢饉による米価高騰も加わって、元禄15～16年(1702～03)頃には政治経済のゆきづまりに対する民衆の不満がうずまくようになりました。そういう状況の中で元禄15年(1702)の赤穂浪士の討ち入りは成功したのではないのでしょうか。



▲竹内誠館長

巨大材木商の誕生

元禄の建築バブルの頂点に至るまでにおびただしい量の材木が用いられました。それを取り扱う材木商は一応入札で選ばれていたもののやはり談合があり、袖の下などの政治の力が働いていたことは新井白石の

『折たく柴の記』に克明に書かれています。紀伊国屋文左衛門(紀文)、奈良屋茂左衛門(奈良茂)はその代表でした。奈良茂は御三家の筆頭の尾張藩と、紀文は元禄時代の実力者である老中忍藩阿部豊後守正武と組んで仕事を請け負いました。

紀伊国屋文左衛門とは

幕末に為永春水が紀伊国屋文左衛門という実在の人物をモデルにして書いた長編小説『黄金水大尽 盃』は12年間にわたり28編も続き、非常に多くの人に読まれました。その結果、史実と小説がゴチャまぜになり、紀文の実像はわからなくなりました。明治18年(1885)にでた『大日本人名辞書』に小説が紀文の逸話としてそっくり載せられ、これ以降の人物説明は逸話に沿って書かれているものがほとんどです。紀文の研究は紀州出身の「除虫菊」を発明した実業家上山勘太郎が書いた『実伝 紀伊国屋文左衛門』[昭和14年(1939)]

刊]が一つだけあります。しかしこの本は、わか郷土が生んだ偉人という視点からの研究なので、客観性に欠けるところがあります。江戸時代に紀文のことを取り上げた簡単な伝記第1号は『江戸真砂六十帖』(寛延のころ)の書です。八丁堀の材木商で、大金持ち、銭座を請け負い、江の島に石垣を寄進、吉原で小粒金の豆まきをするなど豪遊し、老後は深川八幡宮の辺りに住み7、8年前に死んだとあります。この本には紀州出身であることもみかんでもうけたことも記されていません。それから50年後の山東京伝の『近世奇跡考』ではそれに加えて享保19年(1734)4月24日に死に深川浄等院に葬られ法名は婦性融相とあります。そして幕末の小説『黄金水大尽盃』により、本当の紀伊国屋文左衛門の姿がわからなくなってしまったと思われま

新たに発見された資料から

実際に紀文が材木を切り出していた資料(『井川村史』『静岡県史』)によると、大井川上流駿州井川山

と遠州千頭山から、第1回は元禄5年(1692)から静岡の材木商松木郷藏と5年間、第2回は元禄10年(1697)から紀文だけで5年間、第3回は元禄15年(1702)から郷藏の兄新左衛門と5年間伐り出しています。また紀文が伐って運び出されていない材木5万本があるという報告があり、これを地元民が運び出しているかという願書が享保年間に出されています。

『内閣文庫』の中に元禄14年(1701)に香取神宮の用木60本を紀文が納めたという写し、松木新左衛門に関する情報を集めた『始末聞書』に元禄の末に江戸御殿(御浜御殿か)の御材木を紀文と松木新左衛門が納めて大金をもうけたという記録があります。

成田山新勝寺『江戸開帳寄進帳』は深川永代寺で出開帳が元禄16年(1703)4月から6月に行われた寄進帳です。歌舞伎の市川団十郎親子、生島新五郎、山村長太夫のほか大金拾両を寄進した紀文の名前があります。

阿部正武家の記録『公余録』元禄16年(1703)9月15日の条に紀文が秩父銅山^{けいんざん}見分したとあります。このことから紀文が銅座を請け負ったことが分かります。

紀文の老後

政権が代わって建築プロジェクトがなくなり、乱伐により良材が少なくなることによって政商としての材木屋が栄える時代は終わりました。「家おとろえ」「段々悪くなりて」といっても深川の隠宅は豪華な造りだったようです。二男新四郎は程ヶ谷宿本陣軽部家へ持参金家作普請付きで婿養子に入った記録が残っています。奈良屋茂左衛門(神田安休)の遺言[正徳4年(1714)]や財産分配表などの『神田家文書』をみても老後は蓄えたお金と店賃収入と貸金の利息で豊かに過ごしていたことがうかがえます。

【記録】文：広報部会・佐藤美代子
写真：同・五十島正修

第12回定期総会開催、マンネリを打破してさらなる充実を!

江戸東京博物館友の会の平成24年度定期総会は、5月26日(土)13時15分から江戸博1階ホールにて開催されました。司会の柏木静さんの進行により、松原良会長のあいさつの後、来賓を代表して江戸博小林淳一副館長からご祝辞をいただきました。

続いて来賓の江里口友子事業企画課長のご紹介があり、その後議長団の選出を行い、議長に野川陽一(事業部会)、副議長に後藤幸子(総務部会)、書記に天野哲夫(広報部会)と内山文伸(事業部会)の各氏が選出されました。

冒頭、議長より出席者108人、委任状697人、合計805人で年度末会員1,573人の3分の1の定足数を満たし本総会が成立するとの報告があ

りました(最終的な出席者は179人)。

まず、第1号議案「平成23年度事業報告ならびに収支決算報告」が上程され、会長、各部長、プロジェクト担当、会計担当および監事から説明があり、特に質問もなく議案は可決されました。

次に、第2号議案「平成24年度事業計画案ならびに事業予算案について」が上程され、会長から「新規事業・活動でマンネリ化を防ぎ、より充実した事業・活動となるよう推進する」などの基本方針が説明され、続いて各担当から事業計画案、予算案の説明があり可決されました。

さらに、第3号議案「役員の補充選出について」が上程され、会長から説明があつて、異議なく可決されました。

最後にシンボルマークの入選者の表彰を行い、定期総会は14時20分に終了しました。

休憩の後、江戸博竹内誠館長による記念講演「紀伊国屋文左衛門の実像」がありました(講演要旨は1~2頁参照)。

16時45分より7階「桜茶寮」にて会員交流会が行われました。竹内館長、小林副館長、江里口事業企画課長も出席され、和やかな雰囲気の中、会員相互の親睦が深められた約1時間半でした。

また、当日「東日本大震災への義援金」を募集した結果、合計3,210円が寄せられ、これに友の会から上積みして日本赤十字を通じ寄付しました。

【取材】文：広報部会・天野哲夫



会員に聞く

名物ガイドの山本市郎さん

当友の会の初代会長を務められた山本市郎さんにお話を伺いました。現在は江戸博の名物ボランティアガイドとして活躍されています。

—山本さんのいで立ちは「昔の飴売りの恰好だ」とか「いや、瓦版売りの扮装で案内しているよ!」とのうわさですが。

いやあ、これは袴纏ですよ。市販されている普通のお祭り袴纏ですが、初めて着て以来、気に入っていつもこの衣装ですよ。英語のガイドが多いので、外人さんには、日本的な衣装の方がよいと思ひまして…。

—初代会長になられたきっかけは。

15年前から江戸博ボランティアをしていましたが、博物館側から友の会設立のお声がかかり、設立総会が開催されたのが平成13年(2001)5月19日でした。そのころ博物館によく顔出ししていたので、会長に推されたという次第です。当初の会員数は約500人、ボランティアは75人で、半分は英語解説の人でした。

—初期の友の会はどのようにでしたか。

一言でいえば「多士済々」でした。現在のように、専門的なサークルや、見学会があるわけではなく、会報中心で自己流意見をまとめたような個性がありました。他にセミナーや内覧会もありましたが、江戸博で大ヒットした展覧会は「ポンペイ展」でした。西欧やロシア・エジプト展なども人気で、20万人の来場者が見込める海外展は欠かせないものでした。

—英語のマスターはどのように。ニュージーランドで5年間生活していましたが、帰国後江戸博でボランティアを募集していましたので、応募しました。条件は英検準一級以上でしたので、英語の勉強はそれなりにしましたよ。江戸に関する興味は、ボランティアを始めてからですね。

—ボランティア活動の真髄は。

江戸博から示される、展示に関する資料はテーマと部分的なものですから全体の流れを自分で調べ、勉強しなければなりません。また、単に展示物の説明だけでなく、戦中戦後における日本の生活を外国人や若い人たちに話し、日本への理解を深めてもらえるよう心がけています。



▲山本市郎さん

この4月、米軍から依頼があり、海軍司令官一行12人程を案内しましたが、江戸博の外でこのような体験はできませんので、これがボランティアを続ける醍醐味かもしれません。

(後記)山本さんは毎週火・木・土曜日に常設展示室で解説されています。袴纏姿を見かけましたら、ぜひお声をかけてお話を伺ってみてはいかがでしょうか。終始にこやかに話される山本さんの袴纏の胸には「睦」の字が染められていました。

【聞き手】文・写真:

広報部会・国定美津子

会員からの投稿

上野と私

なる 成 かわ 澤 あつ 渥 こ 子

「上野の山」は化粧直し、ですか…。根岸小学校へは始業のベルが鳴るのを聞いてからでも、とびこんで間に

合う程の近くで、小学校の「書き初め展」は台東区にあるので、高い階段を上がったの都美術館が会場でした。母と二人で「心に平和を」と書いた書き初めを探しました。金賞でした。書きあがった書き初めを見た時、心の字のハネがとぎれる字になってしまったので、母にチョンボすることを勧められたのですが、かたくなに断り、提出したものでした。

忍岡中学校は確か住所が「上野公園〇〇丁目〇〇番」だったように思います。「ツタンカーメン展」「ミロのビーナス展」。ゾロゾロと学校から歩いての鑑賞は中学だったかしら。

竹台高校の時もこれまた歩いてゾロゾロと寛永寺坂を通り、寛永寺をぬけて東京国立博物館へ、でしたし。

小学校の写生大会も上野の山で東京国立博物館の表慶館を外から描いて上野の美術館に出品されたっけ。

東京文化会館が出来たのは中学1年の時でした。そして噴水広場が出来たのが高校1年の時。その後、前述の都美術館が建てかえられ寂しい思いがありました。新しくなった美術館へは一度足を運んだだけです。

不忍池の納涼大会へも、夜、父と母と三人で、でした。帰りは甘味処の「みはし」に寄って、頭、キンキンになりながら氷を食べるのが楽しみでした。植木屋もグルッと池を囲んで何軒も出ましたし、弁天堂の脇では羅宇屋も見かけ父に聞いていました。スズ虫売りも揃ってリーンリーント。

今その納涼大会、不忍池のハスは水がみえない程に大きくなってますが、店は様変わりです。あんな「アジア」でなく、「純国産」だったのに…、と。寛永寺坂も人が歩くことは度外視の道になってしまっ。

卒業してからの就職先は日本橋の三井本館でしたので、この江戸東京博物館は私にとって何かしら思い出させてくれるところなのです。



寛永寺將軍靈廟前の石灯籠

代田 照彦

上野といえば寛永寺、その寛永寺に眠る將軍6人ですが、当時の記録を見ると多数の石灯籠が大名により奉獻されていました。明治維新により寛永寺も手狭になり、これらの石灯籠を保存する場所に苦慮されたことがあったように思われます。

現在、五代將軍勅額門の右側にいくつかの灯籠の礎石があります。私もガイドをやっている、当時の写真を見せると、必ず現在はどうなっていますか、と質問を受けるため、私なりに次の3点を調べてみました。なお、將軍靈廟内は調べるのに許可が必要でお願いをしましたが、一個人の申し出は一切お断りとの理由により残念ながら調べることはできませんでした。

(1) 將軍以外の人に奉獻されているか？

將軍以外に正室などに奉獻されています。現在分かっている方は(イ)四代將軍家綱正室・高巖院(ロ)五代將軍綱吉正室・浄光院(ハ)六代將軍家宣生母・長昌院(ニ)徳川一橋家二代目治済・最樹院。

(2) 何代目まで奉獻されているか？

四代家綱、五代綱吉、八代吉宗、十代家治、十一代家斉、十三代家定まで奉獻されています。家定正室・天璋院のは残念ながら見あたりません。

(3) 奉獻された当時の石灯籠は現在どこに？

旧寛永寺内の子院の庭内と、一般寺院や家の庭内で利用されたりしています。また当初は庭内にあったが都合上じゃまになり荒川区役所の広場に寄付？されたりしています。軽井沢浅間山観音堂に40基(所沢在住の伊藤友己氏調査による)、ほかに外国にもあるとの話です。なお、昨年の東日本大震災により寛永寺境内(根本中堂前・常慶院殿勅額門左側)にあった灯籠は倒壊の危険とのことで全部撤去し壊されました。

もし皆様の中で調べられている方および灯籠がある場所をご存じの方

はぜひお教えてください。灯籠は考古学から見るとマイナーで調査をされていないようです(石神裕之慶大准教授が発表されました)。個人的には、これらの調査から当時の大名がどのような形で將軍とつながっていたかを知ることができると思っています。

最後にご協力いただいた伊藤氏、石神先生ほか関係の方々に感謝いたします。私のまとめた資料は都公文書館、都図書館(港区)に提出しています。

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会：4月7日(土)松原良さんが月番で、浅草今戸の潮江院というお寺で開催された「可楽まつり」に参加した。初代三笑亭可楽の墓にお参りしたあと、可楽一門による奉納落語会を鑑賞。終演後近くの皮革産業資料館に行き、浅草の地場産業・皮革工業の展示を見学した。参加者18人。5月15日(火)島田昭さんの月番で、女流講談師の宝井琴柑嬢案内により、大衆芸能に縁の深い浅草界隈を散策した。琴柑嬢の小気味よい語り口とベテラン会員のみなさんの解説で、浅草が演芸と縁が深いことを改めて知った楽しい散策だった。参加者17人。

◆藩史研究会：4月13日(金)池田敏之さんの世話で「上野国、前橋家と織田家の墓所参拝」を中心にバスツアーを行った。巡ったところは、酒井家菩提寺・龍海院、上野国一之宮貫前神社、小幡では織田家七代の墓所と崇福寺、小幡八幡宮、名勝楽山

園など。参加者は21人。5月11日(金)大渡眞司さんが「上総請西藩」の研究発表を行った。請西藩という小藩ながら大義を貫いた林忠崇について、その自画像や詠歌も紹介しての大変詳しい報告で一同興味深く聞いた。参加者22人。

◆古文書で『八丈実記』を読む会：4月12日(木)、27日(金)、5月10日(木)、25日(金)に例会を開催。参加者は各7、8、8、9人。

◆神田川を歩き楽しむ会：4月26日(木)と29日(日)に第28回として、江戸橋から隅田川に合流するところまで日本橋川沿いに歩いた。この辺は川沿いに歩ける道がなく、4つの橋をジグザグに通過した。途中、小網神社、鐙の渡し跡、東京証券取引所、兜神社、郵便発祥の地、銀行発祥の地、撰社日枝神社、電燈供給発祥の地、高尾稲荷、日本銀行創業の地、船員教育発祥の地などを参拝あるいは見学した。参加者は各53人、27人。5月24日(木)と27日(日)に第29回として、日本橋川と亀島川の分岐点そばの霊岸橋から隅田川へ合流する南高橋までを亀島川沿いに歩き、さらに隅田川に沿って勝鬨橋まで歩いた。今回も見るところが多く、亀島川を時々見ながら、河村瑞賢屋敷跡、新川大神宮、越前堀跡、堀部安兵衛の碑、於岩稲荷田宮神社、日比谷稲荷、今村幸稲荷、八丁堀組屋敷跡、桜川公園(八丁堀跡)、徳船稲荷、江戸湊発祥の地、霊岸島水位観測所、鐵砲洲稲荷などを参拝あるいは見学した。参加者は各44人、34人。



▲東京証券取引所にて(神田川を歩き楽しむ会一行)

◆『江戸名所図会』輪読会：4月16日(月)石井義一さんの担当で、新田大明神社から古川薬師如来堂までを読み、『太平記』に出てくる新田義興の矢口の渡し殺害事件など詳しい説明があった。参加者21人。5月21日(月)生野美知代さんの担当で、光明寺から要島弁財天社までを読み、詳細な現地調査の発表もあり、活発な討論が行なわれた。参加者21人。

* * * *

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しています。奮ってご参加ください(ただし、輪読系の2サークルと「落語と講談を楽しむ会」については定員に欠員が出たときに先着順で参加いただくこととなります)。参加ご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名をご記入の上、友の会事務局へお申込みください。

また新しいサークルの立ち上げを希望の方は友の会事務局へお問い合わせください。

申込・問合せ先

130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局

Tel.03-3626-9910

まけ」つきです。午後1時半に出発し、途中15分ほど休憩を入れただけで歩き通し、最終地点にたどり着いたのは午後5時。健脚でないこのサークルはつとまらないようです。

27日の参加者は34人。サークルに参加している人数は100人を超えるとか。大所帯です。神田川に興味、関心のある人が多いですね。

テキスト(神田川ネットワーク編『神田川 再発見』)を使っていて、その該当ページが毎回予告され皆さん予習してきていることもあり、友の会主催の見学会とは違い、決まったガイド役がいるわけではありません。世話人の松原さんが大まかな説明はしていただきますが、あとは参加している人達の誰かが、その都度自然発生的にテキストにはないうんちくをご披露し、そこから話がひろがるといった感じで進行します。



▲霊岸島水位観測所付近で

茅場町から勝鬃橋まで普通に歩けば3kmもないような距離です。この間に神社や稲荷の多いこと！ また普段なら気が付かずに通るようなところに旧跡の説明板や記念碑などがあり、あちらこちらと訪ねた歩行距離は8kmを超えていました。今回はおまけがたくさんあったということでしょうか？

【取材】文・写真：広報部会・中村貞子

お知らせ

「友の会ホームページ」を一新
<http://www.edo-tomo.jp/>

5月1日から「友の会ホームページ」を一新しました。次の点を変更、新設しています。

●『えど友』の閲覧、催事案内を主体にしました。『えど友』は創刊号から読むことができます。

●文字を大きくして、読みやすくしました。

●過去のセミナー、観覧会、見学会について、それぞれ一覧を作成し、一覧から希望のものを選択すると、該当する『えど友』が閲覧できるようにしました。

●見学会の記録は、地図・写真を主体にしました。写真の説明文に「(写真選択→拡大)」があれば、その写真を選択すると、それが拡大します。

●江戸東京に関する展覧会・催し物情報および江戸東京に関するサイトのリンク集を新設しました。

このように「友の会ホームページ」では、『えど友』に掲載されていない独自の情報も充実させ、会員の皆さんのお役にたつようにしたいと思います。

今後のホームページの改善に役立てたいと思いますので、ホームページについてのご意見、ご感想をお待ちしています。

ホームページ担当(前田太門)：

tmn.maeda@gmail.com

えど友 サークル紹介

神田川を歩き楽しむ会

えど友サークルを広報部会員が訪ねて紹介するシリーズ第2弾は平成21年(2009)10月から活動している「神田川を歩き楽しむ会」です。

5月24日と27日に第29回目が行われましたので、27日(日)に同行させていただきました。その名のとおり、このサークルは毎回外に出て歩くわけですから天候が気になりますが、よほどの悪天でない限り雨でも実施されます。

今回は東京メトロ東西線、日比谷線の「茅場町」駅に集合し、支流となる亀島川を中心歩くルートでした。亀島川だけでは時間に余裕があるということで勝鬃橋までの「お

友の会めも(開催日と人数)

平成24年4月～5月

◆役員会4月10日(火)15人。5月8日(火)14人。◆事業部会4月3日(火)悪天候で中止。5月1日(火)21人。◆広報部会4月17日(火)12人。5月15日(火)14人。◆総務部会4月24日(火)17人。5月22日(火)19人。◆博物館友の会連絡協議会4月24日(火)江戸博6人、友の会13人。◆文政町方書上翻刻プロジェクト4月5日(木)A9人、B9人。4月19日(木)A9人、B10人。5月17日(木)A9人、B9人。◆古文書講座入門編5月2日(水)午前78人・午後64人。初級編5月16日(水)午前52人・午後53人。中級編5月19日(土)午前44人・午後28人。

「江戸の時刻制度と和時計」

講師 佐々木勝浩さん（国立科学博物館名誉研究員）



「三時のお八つ」や「お江戸日本橋七つ立ち」、そして落語「時そば」の九つ。「七つ立ち」は明け方の七つ、すなわち真つ暗な3～4時頃に日本橋を出発することを、時そばの九つは真夜中の12時を意味します。これらは、江戸時代の不定時法の時刻の呼び方です。

江戸の不定時法

江戸時代の不定時法とはどんなものだったのでしょうか。1日を明け六つ、暮れ六つで昼と夜に分け、それぞれを六等分して時刻を割り当てました。その数え方も変わっていて、真夜中の「九つ」から一つずつ数を引いて「四つ」まで数え、正午には「九つ」に戻り、そこからまた一つずつ引いて数えました。その時刻を決める基準が「明け六つ」「暮れ六つ」でした。

天保9年(1838)に出雲の小川友忠は、『西洋時辰儀定刻活測』に「…大星パラバラと見え、掌を見て、細かき筋は見え大筋の三筋ばかり、かなりに見えるとき…」と記しています。この決め方は一見主観的で不正確な印象を受けます。しかしこの時間帯は一日の中で空の明るさが最も大きく変化する時間で、社会生活に十分な精度で誤差は5分以内でした。このような手軽な方法で関東一円が一つの社会経済圏を形成する基盤が整うことが重要で、これが時の共有に果たした役割は少なくなかったと考えられます。

和時計

このような時刻を示す時計として登場したのが和時計です。和時計とは、主に江戸時代に日本で日本の時計師たちによって製作され、不定時法の時刻を表示するように工夫された機械時計を指します。和時計には、掛時計、櫓時計、台時計、尺時計、枕時計、印籠時計などさまざまな種類があります。

日本初の西洋機械時計

西洋の機械時計が日本に入ってきたのは天文20年(1551)のことで、宣教師フランシスコ・ザビエルが周防の国(現在の山口県)の領主大内義隆に贈った時計が最初とされています。この時計は戦乱で失われてしまいましたが、日本で最古の西洋時計が静岡県の久能山東照宮に保存されています。

慶長年間(1596～1614)にメキシコの船が日本に漂着した際、手厚く救助し、建造したばかりの洋式帆船でメキシコへ帰還させました。西洋機械時計はその返礼として慶長16年(1611)に家康に贈られたもので、「1581年にハンス・デ・エバロがマドリッドで作った」と銘板に記されています。

和時計の不定時法対応の方法

西洋の機械時計は定時法の時刻を表示し、日本の不定時法には対応しませんでした。日本の時計師は西洋の時計機構を不定時法に対応するように改良しました。その主なものが二挺天符機構と割駒式文字盤の発明です。

二挺天符機構は、調速機の棒天符を昼用、夜用の二本を用意し節気(約2週間)毎に天符の錘をずらして昼と夜の時刻に合わせます。これを明け六つと暮れ六つに自動的に切り替えるものです。この機構は、江戸時代中期以降の掛時計や櫓時計に見られます。西洋のような調速機の精度の向上を目指すのではなく、不定時法への対応に関心が向いていたことが特徴です。

一方、割駒式文字盤は、時刻名を刻んだ金属片を円周の溝にはめ込んでスライドさせ、節気毎の時刻に手動で合わせるようにしたものです。割駒式文字盤は和時計の中では江戸末期に多く作られた台時計や枕時計に多く採用されています。それらは、

調速機構にひげゼンマイ付き円天符や振り子など定速で時を刻むという西洋の時計機構が取り入れられ、精度も向上しました。

また、尺時計は下降する錘に取り付けた針で時刻を読むようになっていますが、これに用いられる直線形文字盤は西洋には例がなく、日本オリジナルのものとして評価されています。

江戸時代の末期には、和時計のこうしたさまざまな工夫の末に、不定時法の完全自動化機構が現れました。その一つは、三宅庄吉の八角卓上時計や田中久重の万年時計に見られる割駒式文字盤の完全自動化機構で、もう一つは在政作の例に見られる円グラフ自動伸縮指針機構です。これらも日本独自の技術として評価されるべきものです。

温故知新

時計師達は、西洋の時計技術を導入し、それを日本の自然観、季節感に合わせて発展させ、究極の和時計技術を作り上げてきましたが、われわれはこうした歴史的な事実を通じてもっと江戸時代を知る必要があります。

故きを温ねて新しきを知る。われわれが自分の進むべき道を見失ったときよりどころは過去の歴史はありません。博物館は、歴史を守り文化を守る砦、「もの」によって歴史を具体的に示し、実感させてくれる場所なのです。

レポーターからひとこと

正直、和時計はもっと単純な仕組みのものと思っていましたが、われわれの先人は非常に繊細なメカニクを追求していた、というのが受講後の印象です。博物館には可能な限り訪問してみたくまりました。参加者139人。

【記録】文・写真：広報部会 天野哲夫

「新川、小名木川・塩の道」 江戸幕府の開府と舟運路がもたらしたもの

講師 土屋信行さん（えどがわ環境財団理事長）



私は永年建設事業にかかわってきた、いわば「土木屋」ですので、「土木」の観点から見た関東平野についてお話ししたいと思います。

家康の「水路への思い」

徳川家康は、天正18年(1590)の入府以来、それまでの自然の川筋を大きく変え、江戸の舟運を円滑にするための一大事業を展開するわけですが、そのきっかけとなった出来事があるといわれています。

上杉勢が固める会津を攻めようと7万の軍勢で北上中に、西で石田三成が挙兵したとの知らせを聞いた家康が、取って返すわけですが、利根川を下り、今の江戸川区葛西地域にある「妙見島」のあたりから小さい水路を江戸へ向かって進むとき、甲冑武者の重みで舟が進まなくなり、やむなく陸路を進まなければならないという難儀を経験しました。

これが、後に家康が水路の整備を思いついた最初のきっかけだといわれています。

新川・小名木川の開削と塩田

関ヶ原で勝利を取めた家康が最初に手掛けた事業は、難儀した小さな川を船の通れるような水路とする開削工事でした。それが「新川」です。元からあった船堀川は古川というようになり、今では全体を新川と呼ぶようになりました。行徳にあった小規模な塩田を大規模な入り浜式塩田として開発、天領として江戸を支える塩の供給地として整備していきます。

そして、その塩を円滑に江戸に運ぶための水路として「小名木川」が開削され、行徳→新川→小名木川→道三堀→江戸城という「塩の一大ルート」が完成します。

利根川の東遷と新しい関東舟運路

家康の「水路整備」は江戸中心部に限らず、広く関東平野に及びました。

利根川の東遷は家康が手掛けた大事業でした。古い関東平野の地図を見ると利根川は荒川とともに江戸

湾へ流れていて、現在の流れとは大きく違いました。家康は文禄3年(1594)、江戸に安全で安定的な内船舟運路を確保するため、まず会の川をせき止め、利根川の川筋を東に移し、渡良瀬川に合流させたのを皮切りに、銚子に注ぐ大河を開削しました。また、太日川上流の関宿から野田に至る19kmを開削し、現在の江戸川を整備しました。この事業により、それまでの房総半島周りで難儀した航路にかわり「新しい関東舟運路」が確保され、江戸のまちと太平洋が河川で結ばれるようになりました。

新田開発と灌漑用水

家康は、さらに江戸の穀倉地帯を

作るべく下総台地と武蔵野台地をさむ地帯に葛西用水と見沼用水の2大用水を整備しました。このように、家康が手掛けた利根川の東遷事業は、荒川を西に移した西遷事業とともに、舟運の整備のみならず、穀倉地帯の開発、洪水から江戸を守る治水対策、そしてさらに当時勢力のあった伊達藩から江戸を守る外堀としての役目など、多くの目的をもった大事業だったといわれています。

洪水から江戸を守る—これからの都市防災

家康が漸行した東遷事業は、本来であれば江戸湾に注いでいた利根川、そして銚子に注いでいた鬼怒川の水系をつないで日本最大の流域を持つ利根川を作り出していたわけです。つまり、本来の「水は高さから低きに流れる」川筋とは違った川筋にしたために、その後江戸は大きな洪水に悩むこととなります。

ここに現在の関東平野の「地下水脈」を示す図がありますが、これを見ると地下水脈はすべて昔の利根川や荒川にそって今でも東京湾に注いでいます。江戸時代には、大小250回もの洪水に見舞われました。それを防ぐために日本堤や隅田堤を作り、その中を一大遊水池としたわけです。

家康の行った偉大な東遷事業に思いをはせるとともに、このような歴史的な事実を踏まえ、これからの都市防災にも生かしていきたいものだと思います。

レポーターからひとこと

土木技術士として、地形や岩盤の土質に対する深い研究を踏まえたお話を、終始興味を持って聴かせていただきました。道具がない時代に、堅いローム層をくわ一本で掘った江戸時代の技術と苦勞がしのばれます。それでも「自然の摂理」を侮ってはいけないうのお話に、東日本大震災を経験した私たちは、このことを決して忘れてはいけなうと感じました。参加者は168人。

【記録】文・写真：広報部会 五十島正修

江戸東京博物館友の会特別観覧会
(平成24年6月1日)

江戸東京博物館 開館20周年記念特別展 「日本橋～描かれたランドマークの400年～」



7月16日まで開催されている特別展「日本橋～描かれたランドマークの400年～」の友の会特別観覧会が6月1日(金)17時から開催されました。

担当の我妻直美学芸員による「見どころ解説」では、スクリーンに大きく画像が映し出され、絵の細部についての説明があり、江戸から明治・大正・昭和に描かれた日本橋とその時々の世相について解説されました。

日本橋が描かれた絵とその時代の道具、衣装、書籍などを一緒に展示

して、その時代の雰囲気を醸し出しています。展示品のすべては江戸博が収集したもので、それらの中には、常設展で見覚えのあるものもありました。

第1章 都市・江戸の橋

日本橋を描いた絵の代表作の一つは歌川広重「東海道五拾三次之内 日本橋 朝之景」で、南側から日本橋をほぼ真正面にとらえた絵です。

「隅田川風物図巻」(筆者不詳)は、およそ10mの絵巻で、その四分の一が日本橋川を描いています。この絵巻は「影からくり絵」になっています。「影からくり絵」とは、本紙の一部(例えば、花火、提灯)を切り抜き、その部分の裏側に薄い和紙を貼り、後ろから光を当てると、その部分が明るく見えるように細工したものです。今見てもたいへん興味深いものです。

第2章 日本橋を描く

日本橋の北詰には魚河岸・魚市、南詰には高札場がありました。日本橋を描いた絵には、魚河岸・魚市を手前に、背後に江戸城・富士山を望むような構図が多いようです。

広重の「東都名所 日本橋真景并

に魚市全図」は、その典型で、魚市のにぎわい、日本橋川を行き来するたくさんの舟が描かれています。

溪斎英泉の「江戸日本橋より富士を見る図」は、周囲にアルファベットのような囲みがあり、興味深いものです。

第3章 文明開化と日本橋

明治3年(1870)の歌川芳虎の「東京日本橋風景」では、日本橋を渡る馬車、人力車、自転車など、当時の最先端の乗物が描かれています。また、明治5年(1872)の絵には、日本橋が、車道と歩道がさくで分離されている様子、電柱、洋館なども描かれています。

第4章 石で造られた日本橋

現在の石造りの日本橋は、明治44年(1911)に開通しました。日本橋を象徴していた擬宝珠がなくなり、麒麟像のある中央柱を中心にした構図の絵が多く描かれるようになりました。

また、石造りの日本橋は、その時々の世相とともに写真に収められています。その写真も展示されていて、懐かしい風景の写真にも出会うことができました。参加者98人。

【取材】文・写真：広報部会・前田太門

江戸博クリップ

「私の好きな音楽」

都市歴史研究室 研究員 米山 勇

自分でも、趣味が少ないのか多趣味なのか、判断しかねる人間である。突如ジョギングに凝ったり、苦手な料理にチャレンジしてみたり、ゴルフの打ち放しに通ったり。ある夜から急にテレビゲームにハマったりすることもある。でも長続きしない。要するに飽きっぽいのだろう。そんな私でも、ひとつだけ40年付き合い続けている趣味がある。クラシック音楽である。

なかでもドビュッシー、ラヴェル、フォーレ、バルトーク、プロコフィエフ、ヴォーン＝ウィリアムスといった近代の音楽が好きだ。バッハ、モーツァルト、ベートーヴェンなど、「古き良き時代のクラシック音楽」もちろんいいが、自分の心象とリン

クするような音楽、身を振るような美しさを体感できる音楽とくに惹かれる。仕事の上で近代建築史を専門としていることもあるのだろうが、空間そのものをつくりだしてしまうような、近代の音楽が圧倒的に好きなのだ。

上記の作曲家たちは有名なので、ご存知の方も多だろう。ドビュッシーなら「亜麻色の髪の乙女」「月の光」、ラヴェルなら「ボレロ」「亡き王女のためのパヴァーヌ」、フォーレなら「レクイエム」「夢のあとに」などが広く知られている。けれど、私がかもっとも愛する作曲家は、一般にはほとんど知られていない。イギリス近代の作曲家、フレデリック・ディーリアス(1862-1934)である。

ディーリアスの音楽は、風景そのものだ。「春初めてのカッコウを聞いて」は春の訪れを実感させ、「夏の歌」はジリジリと照らす太陽とひまわり、蟬の声を彷彿とさせる。ヴェルレーヌ歌詞の「白い月」は透明な秋の月夜、「高い丘の歌」は寒風吹きすさぶ真冬の孤独感とメランコリーを描く。

ディーリアスの音楽をまだ聞いたことのない方、ぜひ一度お聞きになってみてください。かまえず、鯨張らず、空気を吸うような感じで。ディーリアスの音楽は「自然」そのものなのでありますから。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸東京博物館友の会 見学会 (平成24年4月22日)

「再訪 江戸四宿を歩く —内藤新宿—」



「四宿」最後の見学会となる内藤新宿の再訪が、4月22日に行われました。集合場所は「新宿御苑前」駅より徒歩5分の四谷区民センター。曇り模様でしたが、遅咲きの桜を眺めながら巡りました。

内藤新宿の開設と廃止・再開

内藤新宿は、五街道の一つで、元禄11年(1698)に開設許可となった宿場です。譜代大名内藤家の中屋敷の一部などを返上させ用地に充てました。この地はすでに「内藤宿」として繁盛していましたが、「内藤新宿」の名は「内藤宿の新たな宿」という説や、「内藤家屋敷に隣接の新たな宿」という説があります。

しかし、開設後20年足らずの享保3年(1718)に宿場は一時廃止されました。岡場所としてにぎわっていたので、風紀取締の影響といわれています。

その後、他の三宿が財政悪化となったために好転し、明和9年(安永元年・1772)、54年ぶりに内藤新宿は再開、「明和の立ち返り」といわれました。

四谷大木戸跡から駿馬塚

江戸時代、現四谷4丁目交差点付近に、「四谷大木戸」が設けられました。寛政3年(1791)町の負担軽減から木戸は廃止され、石垣なども明治9年(1876)に撤去されましたが、「四谷大木戸跡」の交差点は東京都指定旧跡とされています。付近には「四谷大木戸水番所」が置かれ、玉川上水の水量調節やゴミの除去を行っていました。



▲多武峯内藤神社本殿

御苑の東に回ると「多武峯内藤神社」があります。藤原秀郷の末裔内藤氏の屋敷神です。明治16年(1883)に屋敷内から現地に移されましたが、境内には駿馬塚と「白馬の像」を納めた駿馬堂があります。徳川家康から「馬で駆け回っただけの土地を与える」と言われたときの伝説の白馬です。

長善寺、太宗寺など

長善寺は天正3年(1575)に、『甲陽軍鑑』の著者として知られる高坂弾正昌信の居所に結ばれた草庵が始まります。通称「笹寺」の由来は將軍秀忠が鷹狩途中ここに立ち寄り、茂っている笹を見て名付けたとか、家光が巡覧したときに名付けたともいわれています。

太宗寺門前は新宿の中宿に当たり、藪入りには、「閻魔大王と奪衣婆像」の御開帳と縁日でにぎわいました。閻魔堂内をのぞくと、閻魔大王と奪衣婆のぎょろつとした目が光っています。奪衣婆とは三途の川の渡り賃を持たぬ死者がいてとその着衣をはぎ取る役の姥のことで、その恐ろしい姿は閻魔大王以上。



▲太宗寺の閻魔堂

この寺の「江戸六地藏」は甲州への出発点にあたり、背景の桜が映えます。

正受院にも奪衣婆像「綿のおばば」があり、咳止めや虫封じに靈験ありとされ、そのお礼に綿を奉納したそうです。隣りの「成覚寺」は内藤新宿の「投げ込み寺」として知られ、旅籠の飯盛り女たちが合葬されています。

花園神社に芸能神社、新宿追分

花園神社は新宿の総鎮守で、もとは

新宿3丁目追分付近にありましたが、寛永年間(1624-43)に尾張徳川家別邸内の現在地に移りました。現社殿は



▲天龍寺の本堂

昭和40年(1965)の再建で、境内の大鳥神社の西の市は大変な人出でにぎわいます。また、木花之佐久夜毘売を祭神とする芸能浅間神社は今も役者や歌手など芸能関係者の奉納が絶えません。本来、ここは富士塚で、昭和天皇御大典記念に築されましたが、昭和50年(1975)から芸能浅間神社となりました。

新宿追分は甲州・青梅街道の分岐点で、甲州街道は將軍を甲府に避難させるための街道でした。この街道を通るのは高島藩、高遠藩、飯田藩だったとか。

雷電稲荷神社、天龍寺の時の鐘

八幡太郎義家らが雷雨にあつて小さな祠の前で休んでいた時、白いキツネが現れ三回頭を下げると雷雨が止み、無事奥州へ北進できたという「雷電神社」、現在は花園神社の末社です。

天龍寺の時の鐘の初代は、元禄13年(1700)に笠間藩牧野成貞より寄進されたものですが、時刻を知るためのオランダ製の「やぐら時計」も成貞が寄進したものとされています。ここで夕方となり、鐘楼を眺めながら見学会は解散となりました。

レポーターからひとこと

今回の見学会の企画・レジュメ作成を担当された事業部会の野川陽一さんは新宿区在住で、新宿区の史跡ガイドもされています。参加者は172人でした。

【記録】文・写真：広報部会・国定美津子

【田安の台から柳森神社】



田安門

『江戸名所図会』は全7巻20冊の地誌で、天保5年(1834)に巻1-3の10冊、天保7年(1836)に巻4-7の10冊と2度にわたって出版されました。編纂開始から刊行まで30年以上も経っていたため、図会の内容と刊行当時の江戸の風景や町並とに違いも生じていました。今に名残をとどめる図会の名所を求めて、八重桜が満開の四月中旬、日本橋を少し離れた田安門から歩き始めました。

田安の台から三崎稲荷

地下鉄「九段下」の駅を出て田安門はすぐ近くです。この辺りは田安の台と呼ばれ、「東南の方を斜めに見下ろして佳景の地なり」とあります。靖国通りの歩道橋に立つとその高さを実感できて、往時の見晴らしが容易に想像できます。この辺り、もちろん満開の桜はということなのですが、花を散り終えて赤い花柄を残す桜の下に、紫のショカツサイと黄色い菜の花が土手を埋め尽くすさまは好きな風景の一つです。靖国神社大鳥居の前を歩いて九段教会を過ぎると中坂の上に出ます。この坂を下っていくと右側のビルの谷間に筑土神社の大きな鳥居がみえてきます。本殿へはさらに奥に入ります。元は平将門の霊を鎮めるために創建された神社のようですが、幾度か座所を変遷した様子が「狛犬」の説明板に書かれています。安永9年(1780)に元飯田町の氏子が奉納した狛犬はちょっと

かわっていて、阿像は角、吽像は宝珠を頭に載っています。

中坂を下って靖国通りに戻り神保町方面へ歩きます。途中俎橋を渡りますが、その下にあった堀は、俎橋の北にある堀留橋のあたりが末端でした。その先が開削され日本橋川となって、神田川までつながるのは明治36年(1903)です。

専大通りに入り、三崎町2丁目の一つ先の信号から右斜めの通りに入ると水道橋駅のガードに行き当たります。線路に沿ってお茶の水方向に進むと右手に三崎稲荷神社がみえます。古い神社らしいのですが、社伝はよくわかっていないようです。三崎村の鎮守様というところでしょうか？



▲長谷川雪旦 神田上水懸樋

水道橋から淡路坂

三崎稲荷神社から水道橋を渡り外堀通りを上って都立工芸高校前を過ぎた右手に神田上水懸樋跡の石碑がありました。対岸の跡も確認するため水道橋を渡りなおし、皂角坂を上ると、線路側に説明板がたっていました。この向かい側のマンションのウィンドウに、この懸樋の50分の1の模型が展示されています。物売りの人形なども配されてなかなかよく出来ています。模型の前にはサイカチのさやが二つ置かれ、この坂の名の由来を強調しているようでほほえましく感じました。

少し戻って左手小栗坂を下ります。この道は富士見坂で靖国通りへ抜けますが、その一つ手前の通りを左折

し、明大通りを横切って少し行くと左手に太田姫稲荷神社があります。小野 篁と太田道灌の愛娘の抱瘡にまつわる霊験伝承の書かれた説明板が楽しめます。神社東側の池田坂を登り聖橋南詰めで本郷通りを渡ると淡路坂上です。ここに太田姫神社の元宮跡があります。御神木のムクノキに、遷座のいきさつを記した説明板が掛かっています。

昌平橋から柳森神社

昌平橋の名前は、近くの湯島聖堂に祭られる孔子の生地、魯の昌平郷に由来します。現昌平橋もほぼ同じ場所にあります。昌平橋と万世橋の中間あたりには筋違橋がありました。橋の痕跡はありませんが、中央線高架の南側を進むと赤煉瓦の壁際に「御成道」の説明板があり、筋違橋のことが触られています。この橋は須田町から下谷への出口で、須田町側に御門と高札場がありました。そこから路が八方に通じていたため八つ小路の辻といわれました。

享保年間(1716-1735)、筋違橋から浅草橋に至る神田川の堰堤は柳の並木になっていたため柳原の土手と呼ばれていました。柳原通りに入って神田ふれあい橋のすぐ先に柳森神社の緑がみえてきます。柳森神社には富士講との深い関わりを示す石碑があります。安政3年(1856)の地図には富士山の絵が描かれていますが富士塚も築かれていたのでしょうか。この神社には綱吉の生母、桂昌院が江戸城内で創建した福寿稲荷が明治になって合祀され、おタヌキさんと呼ばれて親しまれています。狛犬ならぬ狛たぬき？がユーモラスでこちらの方が目立つほどです。黄緑色のめずらしい花を咲かせる八重桜、御衣黄がちょうど満開で何か得した気分です。神社をあとにしました。

歩行時間：約2時間(見学時間除く)

【取材】歩いた人(文・写真)：

広報部会・中村貞子

催事案内

古文書講座

9月から第2期を開講

9月から下記日程で開講します。受講は自動継続ではありません。改めてお申込みください。また申込はがきは1講座ごととして、**申込の受付は7月末まで**です。

◆入門編

・講師：田中潤さん(学習院大学文学部史学科助教・史学博士／近世の門跡寺院を中核とした朝廷史・仏教史・文化史を研究)

・開催日：9/5(水)、10/3(水)、11/7(水)

◆初級編

・講師：吉成香澄さん(学習院大学大学院史学専攻／最近力を入れている研究テーマ：将軍姫君の儀礼上の贈答関係の範囲・水戸藩財政における幕府の経済的支援と藩主家族の政治的関係について)

・開催日：9/19(水)、10/17(水)、11/28(水)

◆中級編

・講師：長坂良宏さん(学習院大学大学院史学専攻／最近力を入れている研究テーマ：朝幕関係史、その中でも近世後期の朝廷と幕府の関係について)

・開催日：9/15(土)、10/13(土)、11/17(土)
* 9/15(土)は、午前だけの開講(合同講義です)

・時間：午前の講座は10:30～12:30
午後の講座は14:00～16:00

(注意)午前の講座か、午後の講座かの希望を明記

・会場：各講座とも江戸博1階会議室または学習室1、2
・定員：各講座とも80人(会員のみ)
・参加費：各講座とも全3回1,500円(初回一括払い)

◆24年度第1期の残日程

入門編7/4(水)、初級編7/18(水)、中級編7/21(土)

【企画担当責任者】宮 俊(事業部会)

友の会特別観覧会

●江戸東京博物館 開館20周年記念 「二条城展」

◆世界遺産『二条城』の歴史と文化を展示する特別展です。徳川家康が築き、徳川家光が後水尾天皇を迎え、徳川慶喜が大政奉還を決意した二条城は、江戸幕府の始まりと終わりの重要なステージでした。狩野探幽らが描いた絢爛豪華な障壁画(重要文化財)、二条城天守を描いた洛中洛外図屏風など、徳川將軍家の権勢を実感できる展示となっています。担当の齋藤慎一学芸員による「見どころ解説」をお願いしていますので、ご期待ください。

・開催日：8月3日(金)17時～19時
・申込締切：7月23日(月)必着
・会場：江戸東京博物館・1階ホール/1階展示室
・定員：200人 同伴者可(はがきに氏名連記)
・参加費：会員500円・同伴者700円(当日払い)

【企画担当責任者】松原良(事業部会)

友の会セミナー

第119回「三猿のみた江戸—石造物から読み解く近世—」

講師 石神裕之さん(慶應義塾大学准教授)

◆私たちの身近な文化財である石造物。お地蔵さんや馬頭観音、庚申塔をはじめとして、句碑や顕彰碑、昨今話題の津波警告碑など、その種類は多種多様です。その多くは江戸時代に造立されたものですが、東京都区内に現在残っているものだけでも数千基にも及びます。しかしながら最近では、石材の風化や都市開発により消滅していく石造物も少なくありません。今回は民間信仰に由来する庚申塔を足がかりとして、いわば忘れ去られた歴史の証人ともいべき石造物から、蓄積された地域さまざまな歴史を解き明かしていく試みの一端をご紹介します。

○講師略歴：いしがみ・ひろゆき

昭和48年(1973)神奈川県生まれ。平成17年(2005)慶應義塾大学大学院文学研究科後期博士課程単位取得退学。現在、同大学矢上地区文化財調査室准教授。近世・近現代の考古学を研究フィールドとして、主に江戸時代の遺跡調査に携わり、都市江戸のゴミ問題や庚申塔などの石造物を基にした地域の歴史復元などに関心をもってきた。近世庚申塔の考古学的研究で平成18年(2006)、同大学より学位(史学博士)を取得。

・開催日時：7月28日(土)14時～15時30分
・申込締切：7月19日(木)必着
・会場：江戸東京博物館・1階ホール
・定員：200人 同伴者可(はがきに氏名連記)
・参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】西村英夫(事業部会)

第120回「公家・門跡の江戸参向」

講師 田中潤さん(学習院大学文学部史学科助教・史学博士)

◆江戸時代の公家・門跡には、徳川將軍から一万石を給された輪王寺門跡から、江戸時代に取り立てられた三十石三人扶持の公家まで多様な階層がありました。江戸に居住した輪王寺宮を除き、京洛の地に生活の基盤を置いた公家・門跡は、天皇・朝廷へ立場に応じた役割を担う中で、將軍の膝下である江戸へ役目を帯びて参向しています。彼らの江戸参向の道中の様子や、江戸における動向など残された日記から紹介・解説していただきます。

○講師略歴：たなか じゅん

昭和53年(1978)埼玉県生まれ。学習院大学大学院博士後期課程修了。史学博士。近年は、江戸幕府御用絵師、有栖川流書道、有職故実研究など、文献史料と絵画・陶磁器・染織装束などのモノ資料の双方を視野に入れた研究を進めている。現在学習院大学文学部史学科助教・公益法人徳川記念財団特別研究員。平成21年(2009)度から友の会古文書講座講師。現在入門編を担当。

・開催日時：8月11日(土)14:00～15:30
・申込締切：7月31日(火)必着
・会場：江戸東京博物館・1階ホール
・定員：200人 同伴者可(はがきに氏名連記)
・参加費：会員500円・同伴者600円(当日払)

【企画担当責任者】宮 俊(事業部会)

えど友研究発表会

第4回「えど友研究発表会」

◆今年も、会員の皆さんによる研究発表会を開催します。
発表者と演題は次のとおりです。

- ・松本美智子さん『おくのほそ道』の「室の八島」について
- ・寺島玄さん『カスリーン台風風水害点描』を読み解く
- ・富士松松栄太夫さん「元文期豊後節 停止事件 その政治的背景」

以上3人の会員が研究の成果を発表されますので、多くの皆さんのご参加・聴講をお待ちしています。

- 開催日：8月7日(火)12:30~15:40
- 申込締切：7月26日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階学習室1、2
- 定員：80人 同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員・同伴者とも無料

【企画担当責任者】内山文伸(事業部会)

地域文化探訪・学習会 新企画第1弾!

文京ふるさと歴史館を訪ねる

◆新企画の第1回は文京ふるさと歴史館を訪ねます。鷗外、漱石、一葉はじめ多くの文学者が住み愛したまち、各所に由緒ある神社仏閣や歴史を語る建造物、坂、庭園の多いまち・文京の歴史と文化を学びます。

- 開催日：8月21日(火)10時20分集合
- 集合場所：文京ふるさと歴史館入口(東京メトロ丸の内線・都営大江戸線「本郷3丁目」駅から徒歩5分)
- 申込締切：8月9日(木)必着
- 定員：40人(会員のみ)
- *定員を超えた場合は抽選、ご希望に添えないこともあります。
- 参加費：500円 *学習会は訪問先に関係なく一律500円とします。訪問先および参加者の状況により過不足が生じますが、それは友の会として処理します。

【企画担当責任者】清水昌紘(事業部会)

お申込方法

*「えどはくカルチャー」など江戸博への申込と違い、普通はがきで宛先も「友の会事務局」と明記ください。お間違いなく!

◆普通はがきに、①催事名(略名可)・開催日、②会員番号、③氏名(同伴者連記)を明記して下記の「友の会事務局」へ、「往復はがき」の必要はありません。

- ◆締切：各催事の案内をご覧ください。
- ◆申込は、各催事ごとに会員1人1通。
- ◆友の会へのご意見・ご要望があればご記入ください。
- ◆申込先：〒130-0015 東京都墨田区横綱1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局

*お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。

会員優待のお知らせ

会期残りわずか、お見逃しなく!

●江戸東京博物館 開館20周年記念特別展

「日本橋～描かれたランドマークの400年～」

会期 5月26日(土)～7月16日(月・祝)

休館日：毎週月曜日、ただし7月16日は開館

会員：一般500円、65歳以上250円、大・専門生400円

同伴者：一般800円、65歳以上400円、大・専門生640円

*高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。

次回予告

●江戸東京博物館 開館20周年記念

「二条城展」

会期 7月28日(土)～9月23日(日)

休館日：毎週月曜日、ただし8月13日、9月10日、17日は開館

会員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円

同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円

*高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。

●(注)両展とも割引を受けられる同伴者は1人のみです。

企画展のご案内

●企画展

「発掘された日本列島2012」

会期 6月12日(火)～7月29日(日)

休館日：毎週月曜日、ただし7月16日は開館、7月17日は休館

会場 常設展示室5階 第2企画展示室

●次回企画展

「市民からのおくりもの2012」

会期 8月7日(火)～9月23日(日)

休館日：毎週月曜日、ただし8月13日、9月10日、17日は開館

会場 常設展示室5階 第2企画展示室

モニター募集の結果報告

先に『えど友』の編集に関しモニターを募集しましたところ、10人の方から応募がありました。選考の結果、全員にモニターをお願いすることにしましたのでご報告します。

なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

*いずれも申込多数の場合は抽選となる場合があります。

*「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などは事務局員出勤の火曜日から金曜日(10時～12時、13時～17時)にお願いいたします。

*「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会報<えど友>第68号

平成24年7月1日発行(奇数月1日発行)

編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

編集長兼発行人：松原良(会長) 副編集長：菅沼和男
編集人：佐藤幸彦、深尾恵美子、福島信一、内匠屋京子、中村貞子、佐藤美代子、国定美津子、天野哲夫、前田太門、五十島正修

発行：江戸東京博物館友の会

〒130-0015 東京都墨田区横綱1-4-1 電話 03-3626-9910